

くらもりねこ  
蔵守猫の話③

作：富安陽子

蔵の中で猫の鳴き声がしました。ユウ太の家の古い蔵の中で猫が鳴いています。

「あ、蔵守猫が呼んでる」と、ユウ太は思いました。古い蔵の中には捨てられない物がたくさんしまっていて、捨てられない物には忘れられない物語がくっついているのだそうです。蔵守猫はその物語を守る番人……というか番猫なんですけれど、誰にでも見えるというわけではありません。いつでも姿を現すわけでもありません。でも今日はどうやら蔵の中でユウ太を呼んでいるようです。

ユウ太が重たい蔵の扉を開けて中に入ってみると……。いました。やっぱり真っ黒な蔵守猫が蔵の隅っこの古い箆笥の上でこっちを見ていました。片方ずつ瞳の色の違う、金と銀の目がピカリと光ります。

「ちょっと、おつかいをお願いしたいんですがね」と、猫は言いました。

「おつかい？」

ユウ太はびっくりして目を丸くしました。猫におつかいを頼まれるなんて！

「ウミネコ町の古道具屋へ行って、薬壺<sup>くすりつぼ</sup>を一つ受け取ってきてもらいたいんです」

猫がそう言うものですから、ユウ太はもっとびっくりしました。

「ウミネコ町の古道具屋？薬壺を受け取ってくる？なんで？」

「友だちの蔵守猫に頼まれましたね」と猫は言います。

「その壺は、その猫が守る古蔵の中にずっと昔からしまわれていたんです。それをつい先日、家の人が不用品として処分してしまいました。ところがこの壺、物語がくっついているばかりか、実はとても大切なものの入った壺だったんですよ。つまり、その家の幸運をしまった壺だったんですね。ですから壺がなくなってしまうと、幸運もどこかへ行ってしまう。心配した友だちの猫は、なんとかその壺を見つけて取り戻そうと躍起になっていました。すると昨日、ウミネコ町の知り合いから、町の古道具屋でその壺が売られているのを見た、という知らせが入ったそうなんです。だから、あなたにウミネコ町へ行って、その薬壺を受け取ってきて頂きたいんです」

「だけどき」と、ユウ太は言いました。

「ぼく、ウミネコ町なんてどうやって行けばいいのかわかんないもん」

「大丈夫、大丈夫」と、猫はしっぽを振りました。

「三丁目の郵便局とクリーニング屋の間の路地を抜ければ、そこがウミネコ町です」

「でもさ」と、またユウ太は言いました。

「そんな近くなら、どうしてその猫は自分で受け取りに行かないの？ぼくなんかに頼まないで…」

やれやれというように猫は溜息をつきました。

「いいですか？我々蔵守猫というものは、蔵を離れることはできません。だから、あなたに頼んでるんじゃないんですか」

「でもね」と、また、ユウ太。

「なんで、よその蔵守猫がぼくにおつかいを頼むわけ？うちの蔵守猫じゃないのに…」

猫が、もっと大きな溜息をつきます。

「前にもお話しした通り、蔵守猫の姿が見える人なんてめったにおりません。まして、こうやって話が通じる人なんてね。頼みたくても他に頼める人がいない。だから、あなたにお願いしているんです。引き受けて頂けますね？」

猫が金と銀の目をピカリとさせて言うものですから、ユウ太は仕方なく「わかった。行ってくる」とうなずいたのです。猫は満足したように、ちょっと前脚で顔を洗って説明を始めました。

「ウミネコ町についたらまず、町の入口にあるトビウオ亭、という宿屋に行って、古道具屋はどこかとたずねて下さい。案内してくれるはずですから。古道具屋へ行ったら店の主にこう言うんです。蔵守猫のおつかいで、幸運の薬壺を受け取りに来ました、とね。友だちの猫が手配して、もう、イワシを十匹、代金として先払いしてあるそうですから、そう言えば薬壺を渡してくれるはずです。受け取ったらまた、トビウオ亭の前から路地を抜けて帰って来て下さい。そして、銀行の隣の家の古蔵の扉の前に薬壺を置いて言うんです。蔵守さん、薬壺のお届けです、って」

説明を聞いたユウ太は「じゃあ行ってくる」と言って出発したのですが、心の中で「おかしいなあ、」と思っていました。郵便局とクリーニング屋の間の路地の先は駅前商店街のはずです。ウミネコ町なんて聞いたこともありません。ところが――

不思議なことに、その日、細い路地を通り抜けてみると、そこは見たこともない町でした。石畳の道、赤や緑のとんがり屋根をかぶった家々、のっぴの時計台…。そしてユウ太の目の前には、トビウオ亭、という看板をドアにかけた一軒の家が建っていました。

「どうなってんの？」

ユウ太は、トビウオのシルエットに切り抜かれた木の看板をポカンと見上げました。やはりここは、ウミネコ町のようにです。

大きく一つ息を吸い、ユウ太はトビウオ亭のドアを開けて中に足を踏み入れました。

なんとも古めかしい宿屋です。高い天井を支える、煤けたような太い木の梁から、ぼやけた光を放つランプがぶら下がっています。「こんにちは」と声をかけましたが、応える人はいません。正面のフロント前のソファには黒猫が一びき。黒猫といっても、ユウ太の家の蔵守猫のように全身まっ黒ではありません。その猫は四本の脚の先っちょが、くつ下でもはいたように白くなっていました。

「あの一！古道具屋さんはどこか、教えてほしいんですけど！」とどなっても、やっぱり応える人はいません。でも、ソファに座っていた黒猫がひょいと床の上に飛び下りました。

猫はユウ太の前を通過して、開け放しだったドアの前まで行くと、チラリとユウ太の方を見て「ニャア」と鳴きました。まるで、ついて来い、というように。そこでユウ太は、猫の後をついていってみることにしました。

町の通りには人影がありません。歩いているのはユウ太ひとりだけ。でも、猫ならいっぱいいます。道端の木陰や、通り沿いに置かれたベンチの上や、家の軒下も猫だらけ。ユウ太がきよろきよろしながらついていくと、黒猫はやがて一軒の家の前で立ち止まり、また「ニャア」と一声鳴きました。まるで、着きましたよ、というように。

近寄ってみると、確かにその家のドアには「古道具・ねこまた堂、という看板がかかっています。

「ああ、ここか。黒猫、ありがとう」

ユウ太がお礼を言うと、猫はしっぽをひと振りしてもと来た道を帰っていきました。

「こんにちは」

ユウ太が店の中に入っていくと、「いらっしやい」という声がして、店の奥からたて縞の半纏を着たおじさんが姿を現しました。

やっと人間に会えてホッとしたユウ太は、そのおじさんに言いました。

「蔵守猫のおつかいで、幸運の薬壺を受け取りに来ました」

おじさんは「ニャアるほど」と言ってから慌てて「なあるほど」と言い直し、大きくうなずきました。

「お話はうかがっております。只今お持ち致しますので、ちょっとお待ちを」

そう言って店の奥へ引っこんでいくと、四角い箱を持って出てきました。

「こちらでございます」

おじさんがユウ太の目の前で箱の蓋をはぐると、中には両手に収まる程の茶色い壺が入っていました。

「これが、幸運の薬壺？」

ユウ太がたずねると、おじさんが「さようです」とうなずきます。

「今回は大サービスで、イワシ十匹でおゆずりしますが、本当は、あと三匹、アジを追加してもらいたいところです。なにせ、諸物価が高騰しておりますんでね」

こうしてユウ太は幸運の薬壺を受け取り、ねこまた堂のおじさんにお礼を言って店をでました。そして石畳の道を辿り、トビウオ亭の前から細い路地を抜けて、いつもの町に戻りました。受け取った薬壺入りの箱はもちろん言われた通り、銀行の隣の家の蔵の前に置きました。

「蔵守さん、薬壺のお届けです」

そう言って立ち去ろうとした時、重たい蔵の扉がそっと開いて、黒い影のようなものがす早くひったくするように、箱を蔵の中に引き込むのが見えました。

（今のがきっと、この蔵を守ってる蔵守猫なんだろうな）とユウ太は思いました。

その日の後ユウ太は、郵便局とクリーニング屋の間の路地を何度も通ってみたのですが、ウミネコ町に辿り着くことはできませんでした。

「道はいつも同じ所に続いているとは限らないですよ」と蔵守猫は言います。

おつかいから帰った後ユウ太は蔵守猫にたずねてみました。

「ねえ、あの幸運の薬壺には、どんな物語がくっついてるの？」

蔵守猫は、金と銀の目でユウ太を見つめ、やれやれ、というように溜息をつきました。

「言っておきますが、私が守っているのは、この蔵の物語だけです。よその蔵の物語なんて知るもんですか」